



IUFRO-J NEWS

No. 107 (2012.11) —

「IUFRO Unit 7.02.13 侵略的外来種と国際貿易」

第3回研究集会開催報告

東大院新領域 福田健二

我が国が国際森林年の重点の1つとしている国際交流の推進を目的として、病虫害などの侵入生物（外来種）による森林生態系への被害の防止に向けて、外来種、検疫に関する研究発表と普及啓発を行うため、IUFRO 第7部（森林の健全性）のワーキングユニット 7.03.12 Alien invasive species and international trade 侵略的外来種と国際貿易の集会を東京大学農学部弥生講堂において開催した。本集会は、当初は平成23年10月に実施する予定で、IUFRO-J ニュース No.102 (2011.3) において予告していたが、東日本大震災と福島第1

原発事故による混乱を避けるため、平成24年6月10日から16日に日程を変更して開催した。日程を延期し、発表者の募集を再開した2011年秋の時点では、海外からの参加申し込みが少なく、震災と原発事故の影響を強く感じたが、年が明ける頃からは次第に参加者も増加し、最終的には17か国から65名の参加があり、盛況であった。

6月10日には、基調講演として二井一禎京都大学名誉教授による「侵入病害としてのマツノザイセンチュウ (Pine wood nematode, as an example of alien invasive



写真-1 Keynote speech を行う Andrew Liebhold 博士



写真-2 研究発表会の集合写真（右端が筆者）

species)」、横浜植物防疫所の佐藤雅氏による「日本の植物検疫（原題：Plant quarantine in Japan: protecting Japanese agriculture and forests）」がともに英語で行われた。休憩の後、IUFRO（国際森林研究機関連合）役員3名（Hugh Evans 博士（イギリス）、Kerry Britton 博士（アメリカ）、Andrew Liebhold 博士（アメリカ））による侵入生物被害およびその検疫、防除に関する講演が行われた。

同日18時より、懇親会（レセプション）を東京大学農学部食堂において行った。

6月11日～13日には、研究発表会を開催し、口頭発表29件、ポスター発表23件が行われた。口頭発表は、6月11日には「侵入生物による森林病虫害」「マツ材線虫病」のセッション、12日には「侵略的外来種の遺伝子解析、拡大過程とリスク評価」、13日には「植物の検疫体制」のセッションが行われた。また、13日には、ビジネスミーティングを開催し、今回の研究集会の総括および今後の研究の方向性および植物検疫施策に関するディスカッションを行った。今回の国際会議の報告書としては、Proceedingsの印刷は行わず、HP上に研究発表要旨および発表内容のPDFファイル、配布資料等を掲載して、インターネット上で公開することとした。また、IUFROのワーキンググループUnit 7.02.13「Alien invasive species and international trade（侵略的外来種と国際貿易）」の役員の改選が行われ、次期コーディネーターとしてKerry Britton 博士（米国USDA）が選任され、副コーディネーターとしてHugh Evans 博士（英国）、Kaville Sankaran 博士（インド）、福田健二（日本）の3名が選任された。

12日午後には2班に分かれて横浜植物防疫所および森林総合研究所への見学会を行った。横浜植物防疫所では、日本の植物防疫体制に関するDVD上映による説明、病虫害標本の観察や実験施設の見学等を行った。森林総

研（つくば市）では、研究施設の見学と主要な研究テーマの説明を行った。

14日～16日には、森林総研林木育種センターの近藤禎二氏、森林総研東北支所の中村克典氏、山形県森林技術センターの齊藤正一氏の案内により、マツ材線虫病抵抗性育種、山形県におけるナラ枯れの被害実態と防除法、宮城県内のマツ枯れおよび海岸林の津波被害に関する現地検討会を行った。

林木育種センターでは、マツ材線虫病抵抗性育種を中心に、事業の概要と最新の研究成果についての講義を受けた後、苗畑で抵抗性検定の接種方法の説明や採種園の見学を行った。

山形市郊外の大沼公園では、ナラ枯れの実態に関する詳細な説明の後、樹幹注入作業を参加者自身が体験した（写真-4）。一方、宮城県東松島市では、マツ枯れ被害の見学とともに、津波の被害を受けて破壊され土台だけの残る家並みや、破壊されたJRの駅舎や海岸林の様子を見学した。参加者は津波の威力のすさまじさに声を失っていた。

帰りのバスでの別れに際して、多くの参加者から、今までで最も印象に残るIUFROユニット集会だったとの感想が寄せられ、主催者として感無量であった。運営委員会メンバーとしてご尽力いただいた皆様をはじめ、開催にご協力いただいたすべての関係者と参加者ともに感謝する次第である。

なお、今回の会議のProceedingsは予算の都合上、印刷しないこととなったため、口頭発表、ポスター発表の要旨および発表スライド・ポスターのPDFファイルを、下記のサイトにて公開しています。興味のある方は、自由にダウンロードしてください。

<http://hyoka.nenv.k.u-tokyo.ac.jp/alien.html>

次回の集会は、2013年10月に中国青島市にて開催を



写真-3 林木育種センターにおけるマツ材線虫病抵抗性育種の見学



写真-4 山形県でのナラ枯れ防除薬剤の樹幹注入の実地体験

予定しています。詳細は未定ですが、決まり次第、IUFRO ホームページ内のユニット 7.03.12 のページにおいて掲載する予定ですのでご覧ください。

<http://www.iufro.org/science/divisions/division-7/70000/70300/70312/>

最後に、本集会の開催に当たり、共催いただいた森林総合研究所、東京大学大学院農学生命科学研究科および新領域創成科学研究科、後援頂いた林野庁、日本森林学会、樹木医学会、助成金を賜った（財）国土緑化推進機構ならびに鹿島学術振興財団、IUFRO-J の各位に厚くお礼申し上げます。

ポルトガル・リスボンで開催された「2012 IUFRO ALL DIVISION 5 CONFERENCE」に参加して

福岡教育大学技術教育講座 大内 毅

2012年7月8日から13日にかけて、リスボン市内西部にあるエストリル・コングレスセンターにおいて、2012 IUFRO ALL DIVISION 5 CONFERENCE（国際森林研究機構連合 ALL DIVISION 5:以下、D5と記す）が開催された。2年前のソウル世界大会における会合で、D5の5.04.08（Sawing, milling and machining）のデュプティ・コーディネータになった経緯もあって、今回は発表者として、また、デュプティ・コーディネータとしての参加であった。

成田空港から約12時間のフライトでドイツ・フランクフルト空港に到着し、さらに、フランクフルト空港から約3時間のフライトでポルトガル・リスボン国際空港に到着した。その後、空港より専用バス（エアロバス）でカイス・ド・ソドレ駅まで移動し、列車を利用して目的地であるエストリルに入った。ちなみに、カイス・ド・ソドレ駅から途中エストリル駅、そしてカスカイス駅ま

で走る列車は、ユーラシア大陸最西端を走る列車である。現地時間で夜中に到着したため、はじめはよくわからなかったが、朝になって海岸沿いにある景色のきれいな街であることがわかった。移動時間は、片道約20時間（福岡発）となり、かなりの長旅であった。

D5は前回台湾で開催されており、基本的には5年に一度開催される。今回は台湾大会から5年後の開催であった。D5は、主にForest Productsに関連する全ての研究者を対象とするため参加者は多く、登録者だけで500名以上であることが発表された。前回の台湾大会は323名であったので、それに比べるとはるかに多いことがわかる。

実際の研究発表は、口頭発表307題、ポスター発表270題、合計577題の発表が行われた。日本からも、森林総合研究所をはじめ、各大学のスタッフや大学院生の発表が多数行われた。

カンファレンスは、7月8日(日)午後からレジストレーションとポスター発表の準備が始まり、事実上カンファレンスの開始となった。9日(月)はエストリル・コンgresセンターの大ホールにおいて、オープニングセレモニーが行われた後(写真-1)、基調講演、一般発表があり、夕刻にはカクテルパーティーが開かれた。その後は、基調講演、一般発表に加えて10日(火)はグループ・ビジネス・ミーティング、11日(水)は午後からイン・カンファレンスツアー、12日(木)の夜はカンファレンス・ディナー、最終日13日(金)の最後には全体ビジネス・ミーティングが行われた。

カンファレンス初日(9日)は、オープニングセレモニーが行われ、主催者の挨拶の後、ポルトガルの伝統民族歌謡であるFADO(ファド)が演奏された(写真

-2)。女性が歌うのが一般的らしいが、ポルトガルギター2名のみの演奏であった。会場全体にその音色が広がり、想像以上の迫力で、時差ボケで悩んでいた私にとっては、目が覚めるほどのすばらしい演奏であった。

その後、基調講演、口頭発表、および、ポスター発表が日程にしたがって行われた(写真-3)。

D5の発表は、以下のように主なセッションが11あり、非常に多様で、その下部セッションもあることから、同セッションであるにも関わらず発表日が数日に渡ることもあった。

- 5.01 Wood Quality
- 5.02 Physiomechanical properties of wood and wood-based materials
- 5.03 Wood Protection



写真-1 オープニングセレモニーの様子(エストリル・コンgresセンター大ホール)



写真-2 FADO(ファド)の演奏



写真-3 ポスター発表会場

- 5.04 Wood Processing
- 5.05 Composite and Reconstituted Products
- 5.06 Properties and utilization of plantation wood
- 5.07 Energy and Chemicals from Forest Biomass
- 5.10 Forest Products Marketing and Business Management
- 5.11 Non-wood Forest Products
- 5.12 Sustainable utilization of forest products
- 5.14 Forest Products Education

私の発表するセッションは5.04 Wood Processingの下部セッションである5.04.08 Sawing, milling and machiningで、4日目と5日目に発表があり、私は4日目の発表であった。発表題目は「Burr Formation Characteristics in Side Milling with a Computerized Numerically Controlled Router」(CNC ルータを用いた側面加工におけるパリの発生特性について)で、摩耗刃を用いた場合に材表面に発生するパリをハイスピードカメラで撮影し、その解析結果を発表した。発表後の質疑においては、私の英語力を判断してなのか質問は少なかったが、セッションを終えてから立ち話で多くの研究者から意見や実験条件でのアドバイスを頂くことができた。大変参考になり、今後の実験研究を遂行する上で生かしたいと思う。また、他にもパーティクルボードやMDFなどの木質材料の切削における刃物の摩耗特性に関する研究、大径丸太の適正な製材パターンに関する研究、CO2 レーザを用いた木材の加工に関する研究などの発表が行われた。

3日目(11日)午後からのイン・カンファレンスツアーは、Technical Visitsとして5コース設定されていた。このコースは、Web登録の際に選択することができるようになっており、私は製材所の見学が設定されているTechnical Visit 5を選択した。5コースの中でも一番人気のあったコースは、ポルトガルで有名なコルク工場見学コースで、大型バスが2台準備されていた。Technical Visit 5では、指定されたバスに乗って約2時間移動し、ようやく現地に到着した。移動中、ユーカリの木が植林されている景色ばかりであったが、突然、マツの木に変わっていることに気がびびりした。見学先であるレイリア国有林(Leiria National Forest)は、ポルトガル中西部のMarinha Grandeの近くに位置し、砂丘沿いに広がっており、ポルトガルでもっとも古い国有林で、その面積は約1.1万haの広さであった。説明によると、Martime Pine (Pinus pinaster)が植林されており、最近5年間で、約1万5千m³が計画的に伐採されているとのことだった(写真-4)。また、松脂を採

取している場所などの説明もあった(写真-5)。実は、到着して間もなくガイドから、製材所は古くて小さく時間の関係もあって、今回は見学しない旨の説明があり、当初の目的は達成できなかった。しかし、ポルトガルでマツが植林されていることを知ることができた。

4日目(12日)の夜は、カンファレンス・ディナーがカジノ・エストリルで開かれた(写真-6)。エストリルは、ポルトガルで最大のカジノの街であり、カジノ・エストリルは、その名前の通りカジノ場を備えた大きなホールであった。さまざまな伝統芸能が披露される中、本カンファレンスのポスターセッションではベスト・ポスター・アワードとして金・銀・銅賞、それぞれ3件ずつ用意されており、カンファレンス・ディナーにおいてその表彰式が行われた。日本からは唯一、宮崎県木材利用技術センターの赤木剛研究員が、発表題目「Combustion and Weather Resistant Properties of Wood Composites Treated with Wood Ash Based Hydroxyapatite」(木質燃焼灰を利用した水酸アパタイト複合材の燃焼特性および耐候性評価)で、ベスト・ポスター・アワード金賞を



写真-4 見学会 (Leiria National Forest)



写真-5 松脂採取の説明の様子



写真-6 カンファレンス・ディナーの様子
(カジノ・エストリル前の広場)

受賞した。この場をお借りして報告させていただきます。

最終日(13日)は、全体ビジネス・ミーティングがあり、それぞれのセッションから今後の予定や活動計画が報告された。その中でも、複雑に分化したセッションをもう一度見直して、整理しようとする意見が多く出され、その整理統合案も提案された。

特に、担当している5.04.08 Sawing, milling and machiningのセッションは、先述したように5.04 Wood Processingの下部セッションとなっているが、5.04のコーディネータから何も説明がないまま、大きな整理統

合案が示され、ミーティング会場で個人的にかなり動揺した。しかし、5.04.08のコーディネータである Roger Hernandez氏が異議を述べ、何とか継続審議という形でその場は収まった。5.04だけでなく、他のセッションを含めてD5全体で今後も検討を進め、次回の2014年ソルトレイク世界大会までに案をまとめ整理統合する方向で話がまとまった。また、プロシーディングスの電子化やHPに掲載することなど、多くの建設的な意見が出され、これについては意見がまとまらず、今後の検討課題となった。今後検討するにしても、電子メールを通しての会議になると思うので、できる限り多くの意見を反映できるように担当するセッションに関係する方々へ情報をお知らせし、意見が集約できるように務めたいと考えている。個人的には、専門的な内容が共有できて、参加者の建設的な意見が交換できるわかりやすいセッションとなればいいと願っているが、今後のD5の動向を見守りたいと思う。

最後になりましたが、研究者として、個人としても大変有意義な経験を積む機会を与えて頂いた森林総合研究所加工技術研究領域木材機械加工研究室の村田光司室長に深く感謝致します。また、D5の参加にあたっては、IUFRO-Jから旅費の支援を受けました。この場をお借りして感謝の意を表します。

チェコ共和国で開催されたユフロ体細胞胚培養とその他の栄養繁殖技術 (Working Party 2.09.02) 国際集会の概要

—メンデルが遺伝研究を行った修道院のあるブルノ市で—

森林総研・森林バイオ研究センター 石井克明

概要

体細胞胚とは、植物の受精卵からの胚形成と類似の発達経過をたどって体細胞から形成される胚様の器官のことで、森林樹木ではヨーロッパトウヒで1985年に初めて報告された。我が国では、トウヒ、エゾマツ、アカエゾマツについて1991年に初めての報告がある。大量増殖や分子育種及び基礎生化学研究に体細胞胚の培養系を活用する試みが多く行われている。2012年6月25日から6月28日の4日間にわたり、チェコ共和国ブルノ市のバルセロ・ブルノ・パレスホテルにおいて「林木育種と持続的森林管理のための栄養繁殖、バイオテクノロ

ジー、遺伝的改良の統合」と題したIUFRO(国際森林研究機関連合)体細胞胚培養とその他の栄養繁殖技術(Working Party 2.09.02)の国際会議が開催された。この会議は、第1回目が2年前に韓国の水原で開催され、コーディネーターをカナダ天然資源省のYill-Sung Park氏(写真-1)らが努めている。今回は、34カ国106名の参加があった。

開催地のブルノ市は、人口約40万人のチェコ共和国第2の都市で、モラヴィア地方の商工業の中心地である。また、遺伝学のメンデルが、司祭としての生活をしながらエンドウマメの交配実験を行った修道院が博物館



写真-1 WPのコーディネーターのYill-Sung Park

となって町外れにある。

研究発表会

本大会では3人の招待講演、36の口頭発表、55のポスター発表があった。部門は「全体会議と、メンデル講義」、「体細胞胚形成」、「挿し木、器官形成によるマイクロプロパゲーション等を含む他の栄養繁殖技術」、「大量増殖技術の実用化」、「生理学、遺伝学、エピジェネティクス（後生的修飾）、生物工学、凍結保存等」があった。

招待講演者のD. J. Durzanは2年前にカリフォルニア大学デービス校の教授職を引退したが、樹木の組織培養研究では開拓者の1人である。小生もスクリーニングの結果、彼の開発したCampbellとDurzanの培地が、ヒノキの組織培養に適することを見つけた経験がある。今回の講演では、針葉樹の人工珠心という概念やイチイの雌性細胞を宇宙ステーションで大規模バイオリアクターで培養し、有効成分パクリタクセルを生産する計画などの紹介があった。同じく招待講演者のカナダ天然資源省森林局ローレンシアン林業センターのK. Klimaszevskaは、これまで未熟組織からしか体細胞胚が誘導できなかったのを、10年生の樹木の茎頂分裂組織より誘導して注目をあびている。まだ、特定のカナダトウヒG6クローンのみでの成功だが、その個体と体細胞胚を誘導できない他の個体との遺伝子の発現比較解析を行い、ある種のプロテアーゼやペルオキシダーゼ遺伝子の発現がG6クローンでのみ上昇していることを示した。3人目の招待講演者のフィンランドのオウル大学のH. Haggman教授は、欧州での遺伝子組換え森林樹木のバイオセイフティーに関するCOST（欧州科学技術研究協力機構）活動P0905プロジェクトについて4つの重要課題を述べた。それは①遺伝子拡散防止の現封じ込めの効果の検証②遺伝子のゲノムの特定部位への導入

手法の開発③遺伝子組換え樹木のモニタリング手法④遺伝子組換え樹木の植林での、社会経済的、費用対利益分析である。

一般講演やポスター発表では、多くの樹木での体細胞胚の研究の進展、クローンの多品種林業（multi-varietal forestry）での活用法、チークなどの無性繁殖の実用化例、遺伝子操作を用いた、絶滅危惧アメリカ栗の再生等の興味深い発表があった。

エクスカーション

6月24日夕方に、ブルノ市内の徒歩での散策があり、聖ペテロ聖パウロ大聖堂（写真-2）、シュピルベルグ城やメンデル博物館の見学があった。シュピルベルグ城は13世紀の城跡で、第二次世界大戦中にはナチスにより監獄として使われた。メンデル博物館（写真-3）は、メンデルが司祭の仕事をしなが、11年にわたりエンドウマメの交配実験を行った、聖トマーシュ・アウグスティノ修道院（写真-4）の一部を使用して、彼の業績の展示があった。遺伝の法則の展示は勿論だが、彼は養



写真-2 聖ペテロ聖パウロ大聖堂
（左横が会議場のホテル）



写真-3 メンデル博物館展示室入り口



写真-4 メンデルが遺伝研究を行った 聖トマーシュ・アウグスティノ修道院

蜂家でもあったそうで、館内には巣箱の展示や蜜蜂の羽音が響いていた。庭には、マメではなく、バラが植わっており、ペゴニアの赤花と白花を3:1の割合で植えて、分離の法則を示していた(写真-5)。

26日午後は、ブルノ市にあるメンデル大学の植物園を訪問した。メンデル大学は1919年設立の農学、園芸学、林学等の5学部を有する大学で現在11000名の学生が勉学に励んでいる。附属植物園ではランの原種を集めており、特にパフィオペディルムとデンドロビウム等のコレクションに力を入れていた。2001年には、ここで国際蘭展が開催されており、11haの園内には、スギもみられた。

次は、ブルノ市から北東15kmにある、クルシティニにある、メンデル大学の樹木園であった。ここは、主に林学の教育と研究の場になっており、管理林地は10200haである。まず、入り口近くで、3人の制服姿の学生が、トランペットの演奏で歓迎してくれた。形はホルンだが、普通ある指で音を調節するピストンバルブの無い、唇のみでドレミを調節するいわゆるナチュラルトランペットのようであった。林木育種関連では、ヨーロッパカラマツ、ヨーロッパトウヒ、ヨーロッパモミ、ロジポールマツの産地試験地、カバ、ナラ、モミの遺伝子保存林、ヨーロッパカラマツ、ヨーロッパアカマツ、ヨーロッパヤマナラシ、セイヨウハルニレの採種園、苗畑等があった。時間の関係で、ほんの一部を逍遙したのみだが、ここでも導入樹種の中にチェコで最大規模と紹介された、80年生のスギの林があった。

28日の午後最初に訪れた、ブルノ市の東方、スラブコフ・ウ・ブルナ村は1805年ナポレオン軍がオーストリア・ロシア連合軍を破りナポレオンの大陸優位を決定付けた天下分け目の決戦アウステルリッツの戦いで有名



写真-5 ペゴニアの花色で示された分離の法則

な村で、記念碑と博物館や野外展示を見学した。

その後、ブルノ市より東へ70km程のところのクノヴィツェにある、森林鳥獣管理研究所の支所を見学した。そこでは、24年生で成長に優れた雑種ポプラ *Populus tremula* x *P. tremuloides*, や *P. tremula* x *P. tremula* の休眠芽より組織培養により再生した、各20クローン、10クローンが列状に多数植栽されていた。2004年秋に植栽であるので、8年目になり、樹高は平均10m位だった。

挿し木によるポプラのクローン苗の成長試験林の設定では、2003年春植栽の、*P. alba*, *P. alba* x *P. grandidentata*, *P. alba* x *P. tremula*, *P. x canescence*, *P. euramericana*, *P. deltoides* のクローン試験地があった。樹齢6年で成長の評価を行ったところ、基準のI-214 (*P. x euramericana*) より成長の優れていたのは、P-798 (*P. deltoides*), P-781 (*P. x euramericana* 'Koltay'), P-447 (*P. x euramericana* 'CZ-144'), P-789 (*P. deltoides*) であった。上位5クローンの平均胸高直径、樹高、推定材積は 16.5-19.9cm, 13.9-15.3m, 76-121m³/ha であった。

ヤナギの検定林は、2005年の春に *Salix alba* 39クローン、*Salix x rubens* 12クローンの挿し木苗が植栽され、成長と樹形の比較が行われていた(写真-6)。バイオマスエネルギー樹木としての位置付けで、8000本/haの植栽密度であった。

その他、ヨーロッパナラ (*Quercus robur*) の挿し木による再生試験で、発根した苗による植栽試験地があった(写真-7)。シュートに、IBAを処理しての挿し木試験で、クローン間の枯死率に33-65%の差が見られた。種子生産が少ない場合に、発根率の良いクローンの利用を期待していた。



写真-6 クローンヤナギによるバイオマス植栽試験



写真-7 ヨーロッパナラの挿し木増殖クローン試験地

おわりに

会議を通じて、林木の体細胞胚は、樹種や系統により難易に差があることや、成木からの誘導は依然として非常に困難なことが示された。

懇親夕食会では、モーツァルト等の曲のバイオリン演奏、ティンパロムとバイオリン及びベースの合奏があっ

た。ティンパロムは、中欧・東欧地域で見られる大型の打弦楽器で、木琴のようにたたいて演奏する。

尚、次回第3回 WP 国際会議は2年後の2014年に、スペインのヴィトリアで開催することが決定した。よくコーディネートされた WP なので、関心のある方には参加をお勧めしたい。

アジア・太平洋地域林業研究機関連合 (APAFRI) 第6回総会報告

森林総合研究所 理事 大河内勇

はじめに

アジア・太平洋地域林業研究機関連合（以後、APAFRI）は、IUFROと連携関係にあり、IUFROの地域組織として重要な役割を担っています。本連合は、アジア及び太平洋地域における林業研究機関の連合として、1995年にインドネシアのボゴールで設置が決定され、1997年に最初の総会が開催されてから3年ごとに総会を開いてきました。現在では26の研究機関が加盟しています。今年は第6回総会の年にあたり、中国の広東省広州市で8月31日に開催されました。また、森林総合研究所が今期（2009-2012）は執行委員なので、執行委員会にも参加しました。

執行委員会

総会の日の午前中に第18回執行委員会が開催され、第17回執行委員会議事録の承認、APAFRIの活動報告、2012年6月までの予算状況、その他が話し合われました。

また、韓国森林研究所 KFRI と APAFRI が MOU を結び、KFRI が 5 万ドルの寄贈をしたことなどが報告されました。

その他、執行委員会には委員以外の加盟機関もオブザーバーとして参加できるが、この場合は、議決権はないものの自由に発言できることが確認されました。

なお、これまでの執行委員は次の通りです。

議長 Dato' Dr Abd Latif Mohmod FRIM

副議長 Dr VK Bahuguna ICFRE

前議長 Mr KP Ariyadasa FD, Sri Lanka

委員 Dr.Xu Daping, RITF, CAF, China, Dr Isamu Okochi, FFPRI, Japan, Dr Aida Baja-Lapis ERDB, Philippines, Prof M Al Amin IFES, Bangladesh, Dr Putera Parthama/Mr Wisnu Prastowo, FORDA, Indonesia, Prof Simon Saulei, FRI, PNG*

総会

総会は31日午後に開催されました。参加者は、

IPIRTI (Indian Plywood Industries Research and Training Institute), 森林総合研究所, FSIV (Forest Science Institute of Vietnam), ICFRE (Indian Council of Forestry Research and Education, UPM (Universiti Putra Malaysia), UPM Serdang, Selangor, FRIM (Forest Research Institute Malaysia), ERDB (Ecosystems Research and Development Bureau, フィリピン), TFRI (Taiwan Forestry Research Institute), FPRDI (Forest Products Research and Development Institute, フィリピン), FD Sri Lanka, FD Fiji, KFRI (Korea Forest Research Institute), UPLB (University of the Philippines Los Baños), RIF CAF (Research Institute of Forestry, Chinese Academy of Forestry), KU (Kasetsart University, タイ), CoRRB (Council for RNR Research of Bhutan), FRC Sabah (Forest Research Centre Sabah マレーシア), JIRCAS (日本), STA (Sarawak Timber Association, マレーシア), IPB (Bogor Agricultural University インドネシア), UGM (Universitas Gadjah Mada, インドネシア), RITF CAF (Research Institute of Tropical Forestry, Chinese Academy of Forestry), Bioversity International (イタリア), RIFEED CAF (Research Institute of Forest Ecology, Environment and Protection, Chinese Academy of Forestry), RUC (Centre of Forest and Resource Policy Study, Renmin University of China)でした。また、オブザーバーとしてもFAOのアジア太平洋事務局等から多くの方が参加しました。

(1) Dr. Y. S. Rao 林業研究賞

中国の人民大学のDr. Ke氏が受賞したことが報告されました。

(2) 第5回議事録の承認

3年前の総会議事録の承認ですが、特に異議なく承認されました。

(3) 議長活動報告

主な活動内容を列挙すると、以下の通りです。

2009

- ・第2回森林と気候変動に関するASEAN知識ネットワーク会合 クアラルンプール 2/19-20
- ・第3回氷雪災害からの回復及び森林の健全性に関する国際ワークショップ 麗江 (中国) 5/27-28
- ・第7回太平洋地域木材解剖学カンファレンス クアラルンプール UPM 8/3-5
- ・第16回 APAFRI 執行委員会 10/4 APAFRI
- ・第5回 APAFRI 総会 10/4 APAFRI
- ・森林遺伝資源 (FGR) 国際シンポジウム クアラル

ンプール 10/5-8

- ・第2回森林遺伝資源国際情勢アジア会合 クアラルンプール 10/5-8
 - ・アジア太平洋林産物ワークショップ コロンボ 12/14-16
 - ・チークネット ワークショップ ピーチケララ (インド) 11/23-26
- 2010
- ・森林遺伝資源 (FGR) IUFRO カンファレンス クアラルンプール 5/8-12
 - ・第4回国際モクマオウミーティング ハイナン (中国) 5/22-26
 - ・第2回動態プロットデータベース解析ワークショップ FRIM 4/18-24
 - ・第23回アジア太平洋林業委員会 ブータン 6/8-11
 - ・森林遺伝資源保全・管理に関する訓練ワークショップ Coimbatore (インド) 7/5-9
 - ・IUFRO 世界大会 ソウル 8/23-28
 - ・地域ラタンカンファレンス マニラ 8/29-9/1
 - ・自然及び人為攪乱に対する脆弱性調査に関するアジア太平洋シンポジウム マニラ 12/7-10
 - ・第2回アジア太平洋林業分野概観研究 (APFDSOSII) 発足 12/14

2011

- ・The State of the World's Forest Genetic Resources (SoW-FGR) 地域ワークショップ クアラルンプール 5/7-9
- ・気候変動に対する森林の反応と適応的管理に関する国際カンファレンス 宜春 中国 8/8-11
- ・森林の変遷に関する APFNeT 資金プロジェクトの開始ミーティング 北京
- ・森林の健康技術と植物防疫基準に関する APFSN ワークショップ 北京 11/6,8,10-11
- ・第24回アジア太平洋林業委員会及び第2回アジア太平洋林業週間 11/7-11 北京
- ・第17回 APAFRI 執行委員会 北京 11/8
- ・希少・絶滅危惧樹種の国境を越えた複数国家による保全に関するアジア太平洋ワークショップ 広東 12/5-7

2012

- ・緑のアジアを目指した再生、修復、回復に関する国際シンポジウム FRIM 7/3-5
 - ・森林の変遷に関する訓練ワークショップ 7/9-11
- その他, APAFRI が ITTO の資金によるアジア太平洋遺伝資源プログラム (APFORGEN) のホスト

を続けてきたが成功裏に終了したこと、韓国森林研究所とのMOU（上述）、USDAの資金による「アジア太平洋林業研究者名簿」には1000名近いエンターリーがあり、今後も続けること、APFNet資金による「Comparative Analyses of Transitions to Sustainable Forest Management and Rehabilitation」が採択され、北京大学、ソウル大学、京都大学を交えて2回のワークショップを行ったこと、APAFRIの姉妹プログラムなどが活動としてあげられます。

(4) 選挙

執行委員の改選が行われました。

始めに議長が改選されたが、現議長のFRIMのDato' Dr Abd氏が推薦され、再任されました。また、副議長も再選されました。

執行委員は東アジア、東南アジア、南アジア、太平洋地域のそれぞれから1名、それと全域から2名の6名が選ばれます。まず、東アジアでは韓国森林研究所を私が推薦し、推薦を受けた他の研究機関との投票の結果、選出されました。森林総研は地域を定めず推薦を受け、投票の結果、再任されました。

その他も投票の結果、新執行委員は以下の通り決まりました。

議長	Dato' Dr. Abd Latif Mohmod, FRIM, Malaysia
副議長	Dr. VK Bahuguna, ICFRE, India
委員	Dr. Park JungHwan, KFRI, Korea
	Mr. Elik Senivasa Sigaruguru, Dep. of Forestry, Fiji
	Prof. Faridah Hanum Ibrahim, UPM, Malaysia
	Dr. C. N. Pandey, IRIRTI, India
	Dr. Aida Lapis, ERDB, Philippines
	Dr. Isamu Okochi, FFPRI, Japan
監事	Dr. Xu Daping, RITF, CAF, China
	Dr. Romulo Aggangan, FPRDI, Philippines

APAFRIについては、ウェブサイトがあるので是非ご覧ください。

<http://www.apafri.org/abc.htm>

本総会の報告だけでなく、これから開催される各種のワークショップ等の案内、出版物等のダウンロードもあります。

日本からは森林総合研究所と国際農林水産業研究センターだけが加盟していますが、他の国では大学等も多く加盟しています。アジア地域での継続的な研究を行っている大学等、是非とも参加をご検討ください。



「第21回国際木材機械加工セミナー (IWMS-21)」

2013年8月4日～7日

つくば国際会議場 (エポカルつくば)

国際木材機械加工セミナー (International Wood Machining Seminar, IWMS) は、アジア、北米、欧州の

持ち回りで2年ごとに開催されている世界で最もレベルの高い木材機械加工分野の国際研究集会です。日本では、

1995年に第12回を京都で、2003年に第16回を松江でそれぞれ開催しており、この度の第21回のつくばが10年ぶりの開催となります。木材の機械加工の新技术や加工機械・工具の開発に加えて、未利用資源の新加工・利用法、木質系廃棄物の新利用技術、森林の持続的経営を視野に入れた木材加工・利用システム、LCA等木材加工全般についての研究発表と討論が行われます。

主催：第21回国際木材機械加工セミナー組織委員会
独立行政法人 森林総合研究所

一般社団法人 日本木材学会 機械加工研究会
公益社団法人 日本木材加工技術協会 製材・機械加工部会

国際森林研究機関連合 第5部会 製材・機械加工研究会 (IUFRO 5.04.08)

後援：林野庁、一般社団法人 日本木材学会、公益社団法人 日本木材加工技術協会

ウェブサイト：<http://www.ffpri.affrc.go.jp/en/symposium/iwms21/>

連絡先：iwms21@ffpri.affrc.go.jp

IUFRO カンファレンス「小規模林業とコミュニティに密着した林業の未来」 (小規模林業部会 (3.08) とジェンダーと林業 (6.08) との共同開催)

開催日 2013年9月8日(日)～13日(金)

開催場所：福岡市 九州大学

IUFRO「小規模林業」部会は、私有林林業とくにその所有が小規模で分散的であることによる問題を社会科学側面から取り上げている研究グループです。そのため、小規模私有林が多く存在し、小規模私有林が重要な位置づけにある国々、すなわちヨーロッパの国々の研究者がこの部会の主なメンバーです。

一方、「ジェンダーと林業」部会は、男性であること女性であることによる社会的、経済的、文化的な立場や役割の違いが、森林の管理や利用に及ぼしているのか、逆に森林の管理や利用における役割の違いが男性であること女性であることによる立場に及ぼしているのかといったことについて、その知見を共有し普及する研究グループです。こうしたジェンダーの視点は、世界に共通した課題であるものの、どちらかといえば開発途上国で議論が活発です。というのも女性の社会的な地位が、先進国に比して開発途上国において概して相対的に低いと見なされているからでしょう。

このたび、この2つの研究部会がジョイントして、日本で国際研究集会を開催する運びになりました。小規模林業部会として日本での開催は1997年(京都)以来ですし、ジェンダー部会として初めてだと思われます。大変貴重な機会ですので、みなさまの積極的な参加者を期待しております(研究報告申し込みの締め切りは2013年1月末です)。詳細は下記の通りです。

日時：2013年9月8日(日)～13日(金)

9月8日(日) シンポジウム (一般公開)

9月9日(月) ショート・エクスカーション

9月10日(火)～11日(水) 研究発表(口頭・ポスター)

9月12日(木)～13日(金) ポストカンファレンス・エクスカーション

開催場所：福岡市 九州大学

大会テーマ：Future Directions of Small-scale and Community-based Forestry

大会運営委員会：運営委員長 佐藤宣子(九州大学)、
運営委員 川崎章江・百村帝彦(九州大学)、葉山アツコ(久留米大学)、大田伊久雄(愛媛大学)、堀靖人(森林総合研究所)

ウェブサイト：<http://goo.gl/kIWQX>

IUFRO-J News No. 107 平成24年11月26日

国際森林研究機関連合-日本委員会事務局

〒305-8687 茨城県つくば市松の里1

森林総合研究所 国際連携推進拠点

TEL 029-829-8327, 8328

iufro-j@ffpri.affrc.go.jp

[編集・発行]